

## 史跡但馬国分寺跡発掘調査(第34次)の調査結果

### 全国初! 新たな「回廊」発見

1月から行っていた但馬国分寺跡第34次調査で、寺の東端に回廊という渡り廊下が見つかりました。

国分寺とは、奈良時代に聖武天皇の命令で各国に1カ所ずつ建てられた寺院で、但馬国の国分寺は、日高町国分寺に建てられました。これまでの調査で、伽藍(がらん)塔や金堂など僧侶が活動する建物)などの主要な建物が見つかり、1辺約160mの敷地をもつ大寺院だったことが分かっています。

#### 但馬国分寺跡



今回の調査で、伽藍以外の場所に、建物の基礎となる台

石などが見つかり、以前の調査結果と合わせ幅5m、南北52mに及ぶ長い回廊と確認されました。敷地の端で回廊が見つかったのは、全国で68カ所ある国分寺で初めてです。

この回廊の内側には、塔や金堂などに相当する重要な建物が建っていた可能性があり、但馬国分寺がいかに立派な寺だったかを偲ぶことができる貴重な発見で、全国の研究者から大きな注目を集めています。



▲見つかった回廊

## 豊岡を知り、豊岡で動く

### 「豊岡UIJターン企業研究会」開催

2月13日、大阪市内で「豊岡UIJターン企業研究会」を開催し、大学生など約130人が参加しました。

この研究会は、本市の業界動向や企業の活動内容を知ってもらい、職業選択に当り幅広い視野を養うために開催しました。

参加者は、市長から環境と経済が共鳴するまちづくりや芸術文化の創造発信など、世界の人々から尊敬され、尊重される「小さな世界都市」を目



▲企業の説明を聞く参加者

## 地域に根ざし、住民とともに活動

### 「地域おこし協力隊活動報告会」開催

3月1日、本庁舎で、竹野・出石・但東地域の5人の「地域おこし協力隊」が、これまで行ってきた活動について、報告会を行いました。

地域おこし協力隊は、生活の拠点を都市から本市に移し、地域資源を活用した地域活性化などの活動を行いながら、地域への定住・定着を図る取り組みを行っています。



▲活動報告する地域おこし協力隊

## 主な市政の動き

### 【2月】

- 13日・豊岡UIJターン企業研究会(大阪市)
- 16日・豊岡市公営企業審議会
- 19日・豊岡エキシビジョン2016(千代田区)
- 21日・とよおか地域づくり大会2016
- 23日・地域プロデューサー活動報告会

・豊岡市図書館未来プラン検討会議

- 24日・豊岡市地域公共交通会議
- 26日・市議会定例会開会(3月25日)
- 29日・「植村直己冒険賞」受賞者発表
- 30日・「トヨオカム塾」を開催

### 【3月】

- 1日・地域おこし協力隊活動報告会
- 10日・文化庁文化芸術創造都市振興室「第13回クリエイティブCafe」(城崎国際アートセンター)
- 12日・竹野浜地区町並み調査報告会

## 安全・安心な地元野菜を学校給食に

# 中筋地区の農家が主体となった法人が「雪室」試験開始

中筋地区の農家が主体となって設立した未来の種(株)が、雪を利用し食材を保存できる「雪室」の導入試験を開始しました。同法人は、学校給食の地産地消を推進しています。2月27日、中筋小学校の児童が参加して、ジャガイモとタマネギを運び入れました。

雪室は、高さと幅が約3mで、奥行きは約13m。コンテナを改修し、電気を使わず、固く締まった雪で部屋を冷やして、食材を低温保存する仕組みです。この取組みにより、安全・安心な地元の野菜を年間を通して子どもたちに届けられます。

本市は、この取組みを、豊岡らしさ(共存共栄、自然利用、生活哲学)を生かした豊岡ライフスタイルデザインプロジェクトのモデル事業として支援しています。

計画どおりに進めば、豊岡学校給食センターの地産地消の割合が、平成26年度の15%から46%に上昇します。



▲雪室に食材を運び入れた中筋小学校の児童たち

## ローカル&グローバル・マーケティングの戦略的推進、地域の稼ぐ力を引き出し、高める「豊岡版DMO」の設立準備

全国的に人口減少・少子高齢化が進む中、地域経済を振興し、地域の人が地域で職を得て、豊かに暮らせる社会を作るには「観光」による地域づくりが効果的です。

観光客の誘客を促進するには、旅行者ニーズなどの客観的なデータ収集・分析に基づく戦略策定や、地域と地域の観光資源を結び付けての売り

込みが必要です。

本市では、そのかじ取り役としての組織「豊岡版DMO」の設立に向け、全但バス(株)、京都丹後鉄道を運営するWILLER ALLIANCE(株)、但馬銀行、但馬信用金庫と共に準備を進めます。

今年5月ごろの設立に向け、関連する予算を3月の市議会定例会に提出しました。



▲設立準備について記者会見(2月18日)

## 中貝市長の徒然日記 ⑩

### 犬とごきまで

植村直己冒険賞が20回を迎えました。今回の受賞者は、本多有香さん。犬ゾリ使い、というと怪しげに響きますが、カナダで犬ゾリレースに挑み続けている方です。

学生時代に参加したオーロラツアーで、そりを嬉しそうに引いて走る犬に激しく感動したのがきっかけでした。自分で育てた犬たちとごきまで走っていたらどんなに素敵だろう。その夢を捨てきれず、仕事を数年で辞め、単身カナダへ渡って17年。

犬ゾリ使いの修業を重ね、森を自力で切り拓いて家と犬小屋を建て、27頭の犬とともに暮らしておられます。家には電気も水道もきていません。氷点下50度以下の猛吹雪の中を1600km走る過酷な犬ゾリレースに挑戦し、日本人女性として初めて完走。

犬のえさ代やレースに出るお金を稼ぐために、驚くほど多彩に仕事をこなされています。SLマニアの監視、かみ

そり販売、クリスマス用イチゴの検査、着ぐるみで記念撮影、カニ売り。コンパニオンは、足など触られるのですぐ辞めたとか(笑)

歴代受賞者のように、高い山々の登頂や極地横断に成功したとかいうような冒険ではありません。どこまでも犬と走りたくない、ただそれだけのためにすべてを傾注する本多さんの人生そのものが大冒険です。その姿勢に打たれました。子ども思いの親なら卒倒しそうな行動です。当然、周囲は猛反対だったそうです。

改めて20回目までの受賞者の足跡を見ました。冒険者たちは、決して社会的成功者ではありません。総理大臣や大会社の社長になった冒険家、という方はいません。ただ、悔いのない人生を全うしたい、夢を実現したい、という強い思いに突き動かされてきただけ、と言えるのかもしれない。その姿勢の中から、「世の中には様々な人生がある。あつていいのだ」という強烈なメッセージが伝わってくるような気がします。